



裕木奈江



「すっぴん」の舞姫  
女優として、女性としての裕木奈江

儂<sup>はかな</sup>く、そして美しく、夢まぼろしの如く消えた精霊・舞姫。京都まつりのフィナーレを飾った『平安夢幻譚《時空の舞姫》』のヒロイン・舞姫の素顔をもっと、もっと知りたい……。そんな要望に、ちよつとだけ応えます。

# 自分が一番成し得ない道、 成功しにくい道に 進もうと考えたんです。



裕木奈江。彼女が脚光を浴びはじめたのは、2年前にオン・エアされたドラマ「北の国から 94 果立ち」からではないだろうか。都会の雀みの中で生まれた恋が、妊娠・中絶・別れという不幸な結末を迎えてしまう……そんな悲劇的なストーリーを彼女は体当たりで熟演し、視聴者の涙を独占した。と同時に、彼女は数々の映画・ドラマの主演の座を手に入れ、実力派若手女優No.1の座を手にしたのだ。そう、裕木奈江という女優には、人々を魅了する不思議なパワーがある。抱きしめると折れてしまいそうな細い身体、可憐な顔立ち、愛らしい声……。彼女の持つ容姿からは想像もつかないパワーが、全身にみなぎっているのだ。そんな彼女が女優を目指したきっかけは、ちょっと意外なものだった。

「学生時代、誰もが自分の将来を真剣に考える時期があると思うんです。私の場合、十代の前半頃でした。女優を目指そうと思ったのは、「何になりたい」より「自分はまた若いんだ」ということに気づき、それなら自分が一番成し得ない道、成功しにくい道に進もうと考えたからなんです。幼い頃の私は着るものや行動等、すべてにおいて、人の目というものを気にせずには育ちました。また、TVにかじりついたり、レコードを聞きあさったりするようなこともなく、外で一人、遊んでいるような

子供でした。こんな私が女優の道に進むなんて、誰も想像しなかったでしょうね(笑)」

正直いつて驚いた。コギャルと呼ばれて喜んでいる女子高生が「芸能人になってえー有名になりたいのオー」と甘えた声を出している時代に、こんなにきつぱりと「成功しにくい」といい切る世界に飛び込めるなんて。やはり、裕木奈江はタタモノではない。

「女優になることを強く願ったというより「もし、自分の力で人を喜ばせたり、幸せな気分をあたえる事が出来るとしたら。そして、それが自分の職業となるのならそれは、どんなに素敵なことだろう」と、漠然と思っただけです。例えば、文章を書く仕事をしている人が努力だけでいいものを書けるかというところ、そうじゃない。その人は、「話す」ことより「書く」ことを自然だと感じ、書く道に進んだと思うんです。私の場合は「書く」ことが「演じる」ことだった。女優という職業に運命を感じたとか、華やかな世界に強い憧れを抱いたとかじゃなく、私にとって自分自身を表現することが「演じる」ことだったんです。」

彼女の進んだ道は、自分自身が選んだ険しい道。しかし、演じることを自然に感じられたということは、彼女の運命の糸が、どこかで女優につながっていたに違いない。

# 作品の中の人間は、 自分だけで作るものではなく、 結果として生まれるもの。

ブラウン管やスクリーン越しに見る彼女は、傍げで物静かで、弱々しげで……守つてあげたくなるイメージが強かった。しかし、今、目の前で話している彼女は、

一言一言をはっきりと自分の言葉で話すキリッとした印象の大人の女性。世間でいわれている裕木奈江像とちょっと、違う。彼女の演じる役柄は、母を探し出すためにスターの座を目指すひたむきな少女、親友の父親との不倫に悩むOL、就職・恋愛に悩む女子大生等、ほとんどが等身大のものだ。そのために、見ている側は役と彼女のイメージをタブラせて見る傾向があるのかもしれない。

「ひとつの役を一人で判断し、演じるということはありません。家で台本を読むという段階では自分なりの感情移入をしますが、最終的には、撮影現場に集まった監督をはじめとするスタッフが意見を出し合い、

突き詰めていって、はじめてひとつの役が出来上がるんです。たとえ私が「今のは違う」と感じてても、OKと判断されればオン・エアされる。これは、スタッフの皆さんを信頼しているからこそ出来る作業なんです。作品の中の人間は、私だけで作るものではなく、結果として生まれるものですから。私が演じている役は、決して私自身ではないのです。」

架空と現実を演じわけるのが女優の仕事。ともすれば、彼女のイメージとして伝わっているのはあくまでも「役を演じている裕木奈江」なのだ。読者諸君、お間違いないように。

# 舞姫という役は、 歌手としての私にとって 違和感のない役なんです。

そんな彼女にはもうひとつ、歌手としての顔がある。デビューは女優として注目されはじめた年と同じ2年前。以後、6枚のシングルと5枚のアルバム、ライブ・ビデオ等を発表し、女優の時とはひと味も、ふた味も違う歌手・裕木奈江としての世界を築いている。そして、その世界は「平安夢幻譚(時空の舞姫)」のヒロイン・舞姫に共通している……。

「映像の世界では働ながら地道に頑張っているガテン系の役が多いので、華やかで美しい衣装をつけたお姫様役と聞いたときは嬉しくて(笑)。それに舞台上で役を演じるのも、野外ステージも、人前で舞踊を披露するのもはじめてなんです。特に衣装の艶やかさ、素晴らしい感じには感動してしまいました。自分以上に、映像の中の私をイメージしている人には違和感があるかもしれません。

んね。ガテン系ですから(笑)。たぶん、私のCDを聞いて下さって、この役に選んでいただけたのだと思います。歌の世界では大自然とか人間界と違った世界を表現することが多く、輪廻転生的な「何度めぐりあっても同じ形で好きになっていくんだね」という内容の曲もいくつかあるので……舞姫という役は、歌手としての私にとって違和感のない役なんです。」

舞台の見せ場を飾る曲「時空の舞姫」は、舞台上に先がけて発売された6枚目のアルバム「水の精」の中の1曲でもある。そのせいか、当日の彼女の歌声は雨上がりの夜空に澄んだ空気を流し込み、見ているものをより幻想的な世界に魅きこんだ。

「自分のコンサートをやっているような気分になってしまっただけ、この歌を歌っちゃっていいのかしらと(笑)。ただ、舞姫が歌っているのが、きつと裕木奈江というイメージは出ないと思います。」

言葉通り、当日の舞台上に彼女の姿はなかった。雅の原点・婆娑羅をモチーフにしたという衣装に身を包み、レーザー光線飛びかう野外ステージに立つ彼女の演技・舞・歌声は、舞姫以外の何者でもなかったから……。彼女は、この舞台上で、女優として、歌手としての100%の実力を発揮した。間違いなく新境地を開拓しただろう。これを体感できた京都人は、なんて、幸せモノなんだろう。



京都府のワイナリーを舞台にしたスベクター・パワーマンス「平安夢幻譚(時空の舞姫)」のワン・シーン。紅蓮を振り落し、真の都に舞おいた舞姫・舞姫(裕木奈江)と逢命の逢ったふたりの恋人(高橋政宏)との時空を越えた恋の物語は、あじうくの恋の物語の中、足を運んだ人々に感動の涙を流させた。高橋は裕木・舞姫組が担当。

am 4:00 ~ pm 7:00 まで、たっぷり滑る17時間。

1日、  
何時間  
滑れるの  
だろう?

## ダブルプレゼント

- ◎平日、2名以上で来場されたドライバーの方に、1,000円分のフリーチケットを1枚プレゼント。
- ◎1日券と引き替えに、ステキなプレゼントが当たるチャンスカードを差し上げます。

## 直行バスのご案内

●大阪発 京都経由 サンシャイン号(予約制)  
大阪と京都から毎日出発。便利でラクラク、疲れしらずの直行バスです。



- 運行予定/平成6年12月22日木から平成7年3月26日日まで
- 毎日午後8:20、新大阪から出発
- 料金/往復10,000円より
- 問い合わせ先/東和観光・大阪営業所  
TEL.(06)251-3189
- 予約先/ニチアクトラベル・サンシャインツアー  
TEL.(06)344-3077
- 乗車場所/大阪:新大阪駅北側阪急第1駐車場  
京都:京都駅八条口 近鉄改札口前
- ※年末年始・連休の日程は、一部変更となります。

営業時間  
土曜日 am4:00 - pm9:00  
日曜日・祝日 am4:00 - pm7:00  
平日 am8:00 - pm7:00

WASHIGATAKE  
GELANDE  
鷺ヶ岳スキー場

(スキー場連絡先) TEL.(05757)2-5105  
(ホテル予約センター) TEL.(05757)2-5102

〒501-53 岐阜県郡上郡高鷺村大鷺字平沢3262



PROFILE **裕木奈江** (ゆきき・なえ)

神奈川県出身の23歳。O型。  
映画「愛・昧・Me」でスクリーン・デビューし、ドラマ「北の国から'94 巣立ち」で脚光を浴びる。以後、数々のドラマ・映画に出演し、'94年には映画「学校」で日本アカデミー賞新人賞、助演女優賞をW受賞するという快挙を成し遂げる。'92年、「泣いてないってば」で歌手としてデビュー。現在、松本隆プロデュースのアルバム「水の精」を発売中。



私は時々の、喜怒哀楽を表現する  
役者(ゆきき・なえ)の  
写真家・松本隆  
「水の精」時の写真より

恋に落ちる時って、  
何をしても  
落ちるものだと思う。

12月にはライブハウスでのコンサート、来年2月にはブロードウェイ・ミュージカル「二人でお茶を」の主演も決まり、ますます活躍の場を広げていく彼女。気になる恋のお話は!?

「私だって、恋はしたいと思います。でも仕事を頑張っている時って、恋をしなくなりますね。仕事に打ち込んでいるときは、自分に今、何が足りないかがよく見えてくるんですよ。そうになると、仕事が優先してしまっ

て……。運命というロマンチストに思われるかもしれませんが、恋に落ちる時って、何をしても落ちるものだと思うんです。だから、いつか必ず現れると思うし、そう信じていたい。「あつ、この人だ」と思える人が現れるまで恋はしないんじゃないかな。それに、今は作品の中の恋愛だけで充分です。最後の一滴まで絞るように、恋に対する感情を使っていますから(笑)。」

23歳というある意味で年頃の彼女にしてはちょっと寂しいお言葉。でも、女優・歌手としての自分を真剣に見つめているように、素顔の自分を真剣に考えている証拠かもしれない。

「個人的に考えると、「もう何年、恋をしてないのかしら。こんなことでもいいのかしら」なんて、思うこともありますけど(笑)、その分、コンサート会場なんかに行くと、たくさんの方が恋人を見ようという目で私を見つめてくれるんです。普段はカメラの前なので特にそう思うのかもしれないですが、すごいパワーで、私を応援して

くれるんです。その姿を見ると「私はまだ頑張っていける」と思えるんです。コンサートを観に来てくれたり、手紙をくれたり、握手を求めてくれたりする人たちに支えられるということが、これ程までに大きなことということ、こんな立場になるまで知らなかったから。」

最近では、同年代の女性や自分の父親と同世代の方の声援も多くなったという彼女の存在感は、今後ますます大きくなっていくのだろう。最後に、彼女自身の将来への意気込みを聞いてみた。

「もちろん、私の中にも欲はありますが、最終的にはみんなが幸せになった分、自分も幸せを感じられたらいいんじゃないかなって思います。それまでは、今、私が出ること、一生懸命やり続けるだけです。」  
今回のインタビューで、ちょっとだけ彼女の素顔を覗けたような気がする。架空の世界じゃなく、現実の世界で頑張る彼女の魅力は、今後、どんな形で花開くのか、大いに期待したい。